

「エディタ・グルベローヴァ 日本最後のリサイタル」を聴く

2018年11月7日 虎長

はじめに：

10月に大阪、大宮、川崎、東京と巡回リサイタルがあった。川崎の方がアクセスが近く、チケットも安かったが、ピアノ伴奏。ドラマティックな彼女の歌はオーケストラ伴奏で聴きたいと思い、10月28日サントリーホールでの、まさに最後のリサイタルを聴いた。オペラ序曲などが4曲入っており、選択はよかった。このリサイタルのビデオが、曲ごとに分かれてYouTubeで観賞できるので、参考までにURLを下記した。この文章は飛ばし読みしても、歌声だけはYouTubeから聴いてほしい。驚嘆すること請け合い。



夜の女王：

僕が初めてグルベローヴァを観て聴いたのは、出張先のウィーン。1978か1979だったと思うが、国立歌劇場(Fig 1)でのモーツァルト「魔笛」の「夜の女王」だ。彼女は当時32歳。ものすごいコロラトゥーラに度肝を抜かれ、その時の鮮烈な印象はずっと残っており、今回のリサイタルは聴き逃せないと思ったのだ。1973にグライドボーン音楽祭、1977にメトロポリタン・オペラに、「夜の女王」でデビューして名声があがりはじめた頃だった。今、DVDやYouTubeで観聴きできる「夜の女王」は1983バーム指揮、バイエルン国立歌劇場のもの(Fig 2)で、これは僕がウィーンで経験したものに一番近い。スロヴァキアでの歌手デビューが22歳の1968で、その頃の「夜の女王」の独唱(舞台ではない)を、YouTube上のGruberova- A Life for Artという30分ほどの名場面集の冒頭(Fig 3)で見ることができる。この頃から抜群の歌唱力があつたことが分かる。



Fig 1

Fig 2

Fig 3

Fig 2を観賞できるURL: <https://www.youtube.com/watch?v=9Rcg2GZ3Jt8>

Fig 3を観賞できるURL: <https://www.youtube.com/watch?v=EqIzJhqt9Yo>

コロラトゥーラとベルカント：

「コロラトゥーラというソプラノの高音を技巧豊かに歌い上げること」と僕は昔思い込んでいたことがある。正しくは、「急速な楽句やトリル(装飾音)を駆使した、技巧的で華やかな旋律」。ColoraturaのColoraは色彩の意味だから、「色彩豊かな」が元の意味かも知れない。アルトでも男声でもコロラトゥーラはあるらしい。でも主なものは高音ソプラノで、代表は、前述の「夜の女王」といくつかオペラのヒロインが狂って歌う「狂乱の場」である。一方ベルカントとは、「イタリア式の明快な発声法を指し、なめらかで柔らかい響きを持つ『美しい歌唱』」である。コロラトゥーラとベルカントが対称的というのではない。今回のプログラムで、ちょっと分かりにくい記述があった。「コロラトゥーラで大成功をおさめた彼女が次に挑んだのはベルカント・オペラだった。(中略)キャリアの前半は“コロラトゥーラの女王”として、後半は“ベルカントの女王”としてオペラ界の頂点にたった。」というのだ。ベルカント・オペラでも「狂乱の場」でコロラトゥーラが歌われることがある。時代的にはロシーニとヴェルディの間に入る19世紀前半の作曲家ドニゼッティやベッリーニのオペラを特に「ベルカント・オペラ」と呼ぶことを知れば、プログラムの記述の真意が理解できる。確かにグルベローヴァは、キャリ

ア後半に、これら二人の作品の多くに挑んでいる。2009 年、僕がミュンヘンへ、オクトーバ・フェストの時期に遊びに行った時、彼女が 62 歳でドニゼッティの「ルクレツィア・ボルジア」をバイエルン国立歌劇場で演じていた。予約なしで席があるか尋ねようとも思ったが、昼間の美術館巡りで疲れていたのをやめてしまったのが、今では悔やまれる。

今回の歌:

1) ヨハン・シュトラウス 2 世「こうもり」序曲のあと、同じ作曲家による「春の声」が歌われた。弱音・強音のコントラストを効かせすぎて、弱音の時の歌詞がよく聞き取れなかった。「おや？」と思わせたのは、この一曲のみ。今回のリサイタルのものは：<https://www.youtube.com/watch?v=afq8nznVBL5E>
後の他の曲は、どれも素晴らしく、スタンディング・オベーションものだった。

2) ロッシーニの「セヴィリアの理髪師」序曲の後、同じ「セヴィリアの理髪師」からロジーナの aria 「今の歌声は・・・」。装飾音符と高音が散りばめられた華やかなバージョンということで、今年 12 月 23 日に 72 歳になるとは、とても思えない、現役としても最高のコッラトゥーラ・ソプラノだ。今回のリサイタルに「奇跡のソプラノ」と謳っているのは額面通り。

今回のリサイタルの YouTube URL: <https://www.youtube.com/watch?v=65ltEBIzw0I>

3) ヴェルディの「運命の力」序曲のあとは、ヴェルディの「椿姫」からヴィオレッタの aria、「不思議だわ・・・花から花へ」。よく知られた曲なので、聴衆は大喜び。相手のアルフレードが戸外で歌うべきところは、チェロが代行。グルベローヴァは、歌唱力のもとより表現力も衰えておらず、年齢を感じさせない、まさにヒロインのヴィオレッタである。僕は NHK 教育テレビ(当時)でヴェネチアのフェニーチェ劇場(「椿姫」が初演されたところ)での 1992 年上演の「椿姫」でグルベローヴァのヴィオレッタを観たのを憶えている。病身のヒロインにしては体格が堂々としていすぎると感じたが、歌唱力と演技力には感心した。(Fig 4) これは DVD でも入手できるはずだ。なお YouTube で 1968 年の本当に若くて美しい彼女の「椿姫」(舞台)を観ることができる。(Fig 5)ただし、言語はイタリア語でなく、多分スロヴァキア語と推察する。今回のリサイタルの YouTube の URL : https://www.youtube.com/watch?v=yUcy_jaPZuA

下記 Fig 4 と Fig 5 の歌と比較しても、衰えを感じない。聴衆の興奮を共有されたい。



Fig 4

Fig 5

Fig 6

Fig 7

Fig 8

Fig 4 を観賞できる URL: https://www.youtube.com/watch?v=4G_J_sPfQHM

Fig 5 を観賞できる URL: <https://www.youtube.com/watch?v=NPI0ySjrJ6U>

4) 第 2 部はサン＝サーンスの付随音楽「パリュサティス」より「ナイチンゲールと薔薇」で始まった。オペラでなく劇の付随音楽。この歌は歌詞のないヴォカリーズで、僕は初めて聴く曲だったが、うぐいすの声を模しているだけだから、純粋に歌声を楽しむことができた。今回のリサイタルの YouTube URL は：<https://www.youtube.com/watch?v=z9J-K1fgfM>

5) オッフェンバック「天国と地獄」序曲のあとは、ベッリーニの歌劇「テンダのベアトリーチェ」より「もし

私に墓を建てるのが許されても」。オペラそのものは、YouTube で全編(2002 年)を観ることができる。

<https://www.youtube.com/watch?v=ldVlnx8qsEs>

この歌だけなら、今回のリサイタルの URL : <https://www.youtube.com/watch?v=gAfXtAXC6YQ>

で。高音の衰えがなく、聴衆の 90%がスタンディング・オベーション。この歌は、ジョーン・サザランドも歌っていたが、グルベローヴァに軍配が上がると個人的には感じる。ベッリーニ、ドニゼッティのオペラは、カラスが復活させたり、サザランドが広めたりしたことは確か。しかし、このオペラと、ドニゼッティの「シャムニーのリンダ」はグルベローヴァが、よりポピュラーにしたようだ。

6) サン＝サーンスのオペラ「サムソンとデリラ」より「バックナール」が演奏されたあと、いよいよ本日最後の歌。トマのオペラ「ハムレット」より「オフィーリアの狂乱の場」。今回の YouTube URL:

https://www.youtube.com/watch?v=PiVM_L1WwIc

オペラ「ミニオン」で有名なトマのこのオペラは、ハムレットが新王になるという通常とは異なる筋だが、オフィーリアが狂って溺死するのは、通常通り。かなり長い歌だが、最後だけでなく、ここかしこに超高音が散りばめられているから、聴衆は圧倒される。当然、聴衆の 90%がスタンディング・オベーション。

7) アンコールは 3 曲 :

1 曲目 プッチーニ「蝶々夫人」から「あと一步よ」 : https://www.youtube.com/watch?v=aw9_EkxuIgl

2 曲目 ドリーブ「カディスの娘たち」 : <https://www.youtube.com/watch?v=UiBNVBMlaLM>

ミュッセの詩にドリーブ曲をつけたから歌詞はフランス語だが、曲はスペイン風。

3 曲目 「こうもり」から「侯爵様」 : https://www.youtube.com/watch?v=JcfCcB2O_NU

これはグルベローヴァお得意のもの。前奏のところ聴衆は既に大喜びで大拍手。歌い終わったところで全員総立ち。彼女は悲劇のヒロインも見事に演じるが、もともとコミカルな持ち味があると思う。かつてビデオで観たモーツァルト「後宮よりの逃走」のコンスタンツェ(Fig 6)、リヒャルト・シュトラウス「ナクソス島のアリアドネ」のツエルピネッタ(Fig 7)、そしてヨハン・シュトラウス「こうもり」のアデーレ(Fig 8)などだ。

終わりに : グルベローヴァは歌声だけでなく身のこなしも老いを感じさせない。時たま指揮者の背もたれパイプに手を触れていた。つかまらないう程ではないが、体調を維持するためかもしれない。若い時と同じソプラノの高音で聴衆を熱狂させるのは、まさに「奇跡」だ。プラシッド・ドミンゴも今年 76 歳くらいで、指揮者として、またオペラの舞台に立つ歌手として現役だが、歌の方はテノールからバリトンに移っている。コロラトゥーラ・ソプラノを続けるグルベローヴァは、今後は独唱のリサイタルに活動を限るのだろうか？引退するのだろうか？

聴衆全員が大好きな「侯爵様」が終わり、総立ちのオベーションになったのは勿論だったが、最後のリサイタルだけに、「今まで楽しませてくれて有難う」の気持ちがこもった拍手だったと感じた。

以上